

## 第 185 回 山形県社会教育委員の会議 議事録

期 日：平成 31 年 2 月 14 日（木）

時 間：13:30～15:40

場 所：山形県職員研修センター講堂

- 1 開 会
  - 2 山形県教育委員会挨拶（澁江教育次長）
  - 3 出席者紹介
  - 4 座長選出  
安藤委員を選出
  - 5 議 事
    - (1)平成 30 年度社会教育事業について  
資料説明（事務局）
    - (2)平成 31 年度社会教育事業について  
資料説明（事務局）
- (ア)家庭教育・幼児共育・読育 等について**

### **廣木委員**

これまでこの会議に参加する以前は、小さなお子さんに仕事の上で関わる機会はありませんでしたが、こちらの会議に参加するようになって、小さなお子さんや家庭での教育が非常に大事だということを仕事の中でも感じている。今年から生活困窮者の世帯へ伺って学習支援を行うという事業を担当しており、これまで以上に家庭に直接入っていく機会が増える中で、考え、感じたことについてお話したい。

今回特にお話したいのは読育に関することである。今年度担当している世帯の中で一軒、母親が外国語を話す家庭に対して支援を行っている。本人は、学校では友人もたくさんいて、母親も非常に勉強熱心なので、地域のいろいろな科学教室などに参加して、非常に一生懸命取り組んでいる御家庭だと拝見している。ただ、家庭の中で母親がもともとの言語を話すので、本人は母親の母国語を聞いて育っているような状況である。父親が不在の家庭なので、母親と本人の一对一の関わりになっている。学校ではあまり問題は無さそうだが、家庭内の一般的なこと、例えばシャンプーとかコロケとか、そういう言葉を私が話しても、「シャンプーって何？」という反応をすることがあり、私自身も初めての経験だったので、勉強になったと見ているところである。

その家庭と関わるようになり、またこの会議で読育についてのお話を聞くようになって、このお子さんは日本生まれなのだが、そういう読育や母親の絵本の読み聞かせなどはされてきたのだろうかということを感じている。本人は本を読むのが好きで、小学校になってからは本をたくさん読む子なのだが、小さい時の関わりという点はどうだったのか。そういったことを考えると、母親自身は仕事が忙しく、なかなか日本語の上達も難しいような状況で、しかも他にも外国語を話される母親の方々は、おそらく地域にはたくさんいらっしゃると思うので、そういった母親への読み聞かせの仕方に関する地域的なサポートや、そういう機会を設ける場なども、今後検討していただけないかと感じていたところである。

### **新関委員**

私は、この家庭教育と、故郷・伝統に関してお話ししたい。

私は小学生時代、天童市の小・中学校に通学し、冬になると最初はグラウンドや坂道でスキーを練習し、その後、天童高原に毎年スキーの学習に行っていた。そうすると、やはり親も自分の息子・娘がみつともないと嫌だと言って、その時期に一生懸命、天童高原に連れて行ってくれた。土日になると、同じように親に連れて来てもらった友達とたくさん会うという光景もあった。

私自身の息子は、山形市内の大会根小学校・第八中学校に通学したが、その時もまた坂道でのスキーが始まり、その後、高学年になると蔵王に行くということで、私自身も、自分がしてもらったのと同じように、息子に恥ずかしい思いはさせたくないということで、息子を連れて蔵王に行き、何十年ぶりにスキーに触れたことがあった。そうすると、自転車と同じように「昔とった杵柄」で何十年ブランクがあってもすぐに滑れて、「お母さんも上手なんだね」などということから話が広がり、冬になると「じゃあ来週スキーに行くか」という話題にもなった。

先日、近くの宮浦小学校のところの、小さいお子さんがいる方と話をした時に、来年からスキー教室が無くなるという話を聞いた。「何故なのか」という話になった時に、教員の方の負担のことや、教員では人手が足りずに、地域のボランティアの方に今までお力添えいただいていたことも、皆さん多忙でお手伝いをしていただけなくなり、そうすると安全面で心配だということになってしまうのかという話になった。

でも、これから子どもたちが山形を出た時に、山形県人としてスキーが滑れると、自分にこんな特技があったのだ、北国・雪国に生まれたからこそそのスキルであるということ強く意識することがあると思う。そういった機会を無くさないような方向で考えていただければと思う。

伝統というのは小さいうちに刷り込んでおかないと途中からは難しいという点と、それがきっかけで親子がもう一度つながれるという観点から、スキー教室がだんだん衰退している状況の中、何とか復活させるようなお考えを持っていただければと強く思った次第である。

## 高橋一枝委員

先程の読育の件だが、外国人の母親のフォローということで、各市町村でやっているブックスタート事業、赤ちゃんに絵本をとという中で、図書館の方から「〇〇っていいですよ」など言いながら、外国人の母親がいる時も本を読むということはなかなかできない現状がある。あとはそのフォローアップとしての図書館でのお話し会、読み聞かせというところでも、その外国人の母親に対して、日本語で話をしたり英語で話をしたりということも、行っている図書館もあれば、まだ手つかずの図書館もあるので、今後考えていかなければならないと思っている。

それから、昨年度実施された読育の中で、自然体験と一緒にという事業が、読み聞かせプラス体験型という点で、子どもたちが非常に生き生きとお話を聞いて、次に体験をして、またお話に入っていく、という流れがとても良かったので、ここはお話と体験という流れを継続していく事業になってほしいと思った。

もう1つ、ふるさと学習の項目の郷土愛を育む教育の推進ということで、視聴覚教材普及事業の中に視聴覚コンクールがある。お話サークルなどは、自分たちの読むものや地域を題材にした紙芝居などを作っているのだが、それが視聴覚につながるかというとなかなか難しかったり、応募したとしても、自分たちの中では完成しただけで十分という思いがあったりする。ゆえに、視聴覚教材が郷土愛を育む教育の推進につながっているのかどうかということも含めて、もう一度コンクールについて検証してはどうだろうか。あとは、子どもたちが郷土について調べたり、地域の方に聞いたりしたことを総合学習の中で研究しているわけなので、ふるさと学習を大事にするのであれば、そういった分野も、何かコンクールでの表彰などでお示しできるような場面があると、さらにふるさと学習、郷土愛を育むことにつながるのではないかな。

## 二瓶委員

私も、視聴覚コンクールのことが今回少々気になっていた。せっかくいい作品を作っても、それをアーカイブに入れて「以上、終わり」では、もったいないと思う。そこで、せっかくなのでそれを各図書館に巡回するとか、例えば読み聞かせの講座のような時に、その講座の先生のお話は当然として、その他の合間の時間にでも、そう長い話ではないと思うのでそれを実演していただくとか、それを学校の読み聞かせサークルなどに紹介して、複製を作ってもらい、それを各学校・各地域で上演するなどすれば、それを作られた方もとても誇りに思うだろうし、それを見ると「あ、じゃあ私も作ってみようかな」という動機づけになるのではと思うので、もう少し活用できると良い。もったいないと思った。

もう1つ、山形の宝ということで、昨年ユネスコ有形文化遺産に、遊佐のアマハゲを含む「来訪神」が登録された。その前は新庄まつりということだった。今こういったことが山形から多くとりあげられて、登録されたということはたいへん素晴らしいと思っている。山形には本当にたくさん宝物があるのに、自分たちが宝に囲まれているという意識があまり無いのではないかなと思う。都会ばかり見て、東京には何でもあるけど、山形には何も無いと思っている方が多いのではないかなと感じている。山でも川でも自然でも、こういう豊かな文化でも、伝統などもたくさんあるのに、なかなか気づいていないことが多いのではないかな。そこ

で、それらを子どもたちがふるさと塾でとり上げるのもよいのだが、大人の方にはそれを取り上げて普及するような事業は何かあるのだろうか。例えば、今年の遊佐町のアマハゲの団体に対して何か助成をすとか、PRをしてもらう機会を設けるなど、県にとっても非常に良い素材だと思う。これを利用しない手はないのではないかと思うが、何かお考えがあるのかをお聞きしたい。

## 回 答 (事務局)

ふるさと塾の基本的な考え方としては、山形の宝を子どもたちに伝承している団体の支援ということで、発表の機会や、活動をyoutubeなどで広く知っていただくための取り組みなどがある。大人の方々への直接的な支援としては、文化財・生涯学習課で取り組んでいる事業や、県民文化スポーツ課で、伝統芸能に限らず、芸術文化の多岐に渡る団体への支援がなされていることを承知している。

## 佐藤委員

私が関係するところというと、学校と家庭・地域が協働し支え合う仕組みを構築するという分野かと思って資料を読んでいた。私もこのことについてはとても強く感じている。やはり子どもというのは、地域で育てていかなければならないと強く思っているところだが、では果たしてそのような動き・活動が実質的に行われているかということ、なかなか難しいという気がしている。例えば、学校に対してボランティアや寄付など、何らかの支援をしている方々がそれぞれの地域にいらっしゃると思うが、その受け皿もしくは窓口が無いような気がする。勝手に学校に行っ何かをすることは当然できないので、何らかの登録のような制度を設けて、地域の人材や宝をうまく生かしていければ、子どもにとっても、地域の方々にとっても、いい意味での交流がさまざま出てくるのではないかと思っている。空き教室を活用して、地域の方や退職された先生方が常駐をするというようなことも、一つの案としてあるのではないか。

それから、放課後の学校外活動における、子どもたちの安全で健やかな居場所づくりという点に関してだが、上山小学校近くのお寺で、以前から寺子屋のような形で運営をしているところがある。先日その方とお話をしたところ、お寺にはお菓子とかたくさん集まるから、「寺子屋」があることで、かえって食べてもらってよいのだ、と言っていた。ここも、多少のサポートはあるのかもしれないが、ほぼボランティアなのだろうと思う。どこにでもお寺はあるので、地域に貢献していただけるお坊さんのような方々はいるのではないか。子ども好きな方など、ぜひ関わっていただけたらありがたいと思う。

あと全般的に、親がもっと様々な所に関わりを持ってほしいというのが、我々PTAとしての思いである。大人同士の交流の機会がだいぶ少なくなってきたように感じている。人間関係の希薄化と資料にも書いてあるが、面倒であるとか忙しいということを理由にして、集まりに出て来ないということが、不幸な事件につながることもあり得るのではないかと考えている。例えば、祭りの神輿会などのように地域に密着した活動がある地域は、PTA活動もかなりうまくいっているように個人的には感じている。また、子ども会活動も含めて、やはり地元密着型の組織、プラス学区や学校、そういった活動を見て育った子どもたちは、

大人になったら、自分たちもそういうことをやらなければいけないと必然的に思うのではないか。

やはり子どもを育てるには地域、家庭、そして様々な方々との連携といった関わりが必要になってくると改めて思った。

#### **安藤議長**

学校・地域・家庭の連携というところにまで及んでのお話をいただいた。

やはり基本的機会・学習機会の格差の部分の是正をどうするかということで、スキーの問題はまさにそうであると思う。あとは日本語の学習、これは子ども・大人すべてに関わってくる。そしていわゆる地域文化・伝統文化に関する連携、視聴覚コンクール等、そういったものを実施して、成果をどのように共有していくかということが課題かと思う。実際には市町村単位での事業にどのように落とし込んでいくかという話になるかと思うが、事務局で今出た意見等に関してコメント、あるいは見通しがあれば伺いたい。

#### **回 答 (事務局)**

視聴覚コンクールについては、委員の皆様から意見をいただいたとおり、有効な活用方法を検討していかなければならないと感じている。持ち帰って検討させていただきたい。

地域との連携という話があったが、県で実施している地域学校協働活動によって、これからも地域と関われるような体制作りを進めていきたいと考えている。そういった中に、伝統文化や、スキー教室なども組み込める余地があるのではないかとすることも考えながら、進めていく方向で検討していきたい。

#### **安藤議長**

特にスキー等に関しては、地域総合型スポーツクラブとの連携という点で、自治体の方でもスポーツクラブの活用・維持・持続性について考える際に、重要な事業になってくると思うので、教育事務所間等での情報共有が望ましいと感じた。

### **(イ) 青少年期・成人期・高齢期の教育について**

#### **齋藤委員**

1月26日に新庄市でヤングボランティア交流会を実施した。大変盛況だったと思っている。高校生44名、中学生50名が参加して、様々な交流を行った。一般参加者が412名あり、全部合わせて500名以上の人々が、新庄駅前の「ゆめりあ」のホールに集まった。ホールの人たちも「新庄まつりの時しか人がいっぱいにならないが、今日はこんなにいっぱいになった」と大変喜んでいて。売店の人も「今日は売上がいっぱいあった」と喜んでいて。

何故このように参加者が増えてきたのかということ、それは今年一年でできた訳ではなく、昨年、その前からずっと続けてきたことが、成果となって表れてきているのである。広報の仕方にしても、小学校の子どもたちへ「どうぞ来てください」と、教育事務所から各学校に案内している。そして、各市町村のサークルが大判用紙を使って活動紹介を行ったのだが、

その発表を見てみると、実に多種多様な活動をしている。1つ1つメモをとったところ、何と50くらいの活動があった。こんなに多くの活動が行われているということに驚きを持った。計画段階も、実施している時の様子も良かった。さらにその活動紹介に使った大判用紙を、今度は駅のストリートギャラリーに展示をして、一般の人にも見ていただくという広報活動も良かったし、テレビ・新聞からも取材に来ていただいた。これがまた一般の人たちに対する広報になった。このような形で今後も行われれば、もっと良くなるのではないかと思った。

これに関わってもう1つ、金山町に新しいサークルができた。金山は杉で有名だが、「SUGI ☆スターズ」という高校生ボランティアサークルが新しく誕生した。それは何故かというところ、3、4年前に「たこむす」というサークルがあったのだが、その卒業生が金山町の教育委員会に採用されて、その方が高校生のサークル活動を指導しているということなのである。ボランティアサークルの卒業生が、今度は指導に回るというようなサイクルができてきている。このことがすごく良いと思った。ぜひ、このようにして高校生ボランティアサークルを持続するために、指導者を育てていかなければならないと思った。

もう1つ、ちょっと残念なこともあった。県の方で夏休みに、中学生の地域青少年ボランティア養成講座を行っている。1泊2日で実施しているが、そこに参加した中学生が、実際に1月26日のヤングボランティア交流会の時に何人参加したのかを聞いてみたところ、ゼロだった。だから、夏休みの養成講座に参加した人たちが、実際に今度は地域で自分たちが進んでボランティア活動に乗り出していけるような取り組み・つながりが、今後ますます重要になってくるのではないかと思った。

成人期の教育に関して、資料13ページの「成人期・高齢期における市町村の事業の推移」という表がある。平成27～29年の3年間に渡って講座が増えているという内容だが、これは中身が大切になってくる。単に講座や受講者が増えたということではなくて、どのような内容で行われてきたのか、趣味に関わるものなのか、それとも必要課題・要求課題に関する学習講座がどのくらいあったのか、このようなことをぜひ今後調査して指導をいただければ、なお高齢期・成人期の教育が充実してくるのではないかと思った。

## **田中委員**

私の専門ではないが、青少年の地域力発揮ということに関して、参考までに紹介したい例があったのでお話ししたい。

私は、市民活動団体の1つである「みやぎ・やまがた女性交流機構」の理事を務めている。毎年1回、山形市と仙台市で交互に女性の交流会を開催しており今年で13回目になるが、今年は私どもの機構と仙台の公益財団東北活性化研究センターさんと、県の宮城・山形未来創造会議さんとの共催ということで開催した。今回は2月2日に山形市内のホテルで開催したが、一昨年から宮城・山形に加えて福島的女性も含めての開催となっている。13回目ということで、今回は「今こそ広げよう！地域をつなぐ、世代をつなぐ真のネットワーク」をテーマに、女性だけではなく、一般の学生や社会人だけでもなく、高校生・大学生たちも一緒に、男子の高校生や大学生も含めて開催してみようと、南東北3県の女性の他に男子高校生・大学生も交えて、約120人の方が参加してくれた。そのうち3分の1は高校生や大学

生で、男子の高校生・大学生が十数人参加してくれた。

午前中のパネルディスカッションの後に、午後からは3つのテーマに分かれて分科会を行い、1つの分科会は十数人程度で、高校生・大学生・一般と、世代も職種も違う方たちがみんな1つのテーブルを囲んでの実施だった。私は「自分の好きなことを仕事にする」というテーマの分科会のコーディネーターを務めた。男子高校生、女子高校生、芸工大の女子学生が2人、あとは公務員の方、自営業の方というメンバー構成だった。

大学生の方はちょうど就活の時期だったのだが、せっかく芸工大で学んだのに都会に出て働きたいということだったので、普段はあまり大学生と接する機会がないが、「どうして？山形じゃ就職先がないの？」といったことを聞いてみると、やはり交通の便が悪いからということ話を話していた。男子高校生はまだ2年生で、具体的な希望は無かったようだが、女子高校生はホテルに就職したいということで、交流会の会場になったホテルの方に早速お話を伺ったという、非常に積極的な生徒だった。実際にそういう世代の違う人たちと話してみて、本当に、「今の若い人は」と言えないくらい、すごくしっかりしていて、こんなふうに分科会の将来をきちんと考えているということがよく分かった。

若い方たちからも、自営業をしている方とか公務員になった方に対して「何故その仕事に就いたのですか？」とか、女性に対して「子どもを産んだ後も仕事をどうしたら続けていけるのですか？」という質問も出ていた。若い人たちにとっての大人という存在は、普段学校の先生や親ぐらいしかいないので、あまり普段交流のない立場・職業の人たちとふれ合う機会があり、最初は女性の交流会の中に男性の学生さんもいて、どうかなあと少し心配もあったが、終わってみれば本当にどちらの世代にとっても、交流を深めることができ良かったという意見をいただくことができた。

青少年の地域力発揮という観点で様々な事業が行われているが、力を発揮するために、高校生や大学生などの若い人たちが、どういう考えを持っているのかという生の声を聞いて、それを反映すると良いのではないかと、私なりに思った。そうすると、高校生や中学生などの若い世代にとっても、大人世代にとっても世代間の交流になるし、「今どきの若い者の考えなんて分からない」などと言わずに、様々気軽に話し合うことで理解が深まっていくのではないか。

以上、私の活動の紹介のようになってしまったが、参考にしていただければと思う。

### **高橋政吉委員**

皆さんのお話を聞きながら、中学生というのはやはりいろいろなことがあって忙しい、というのが正直なところだ。現在、部活動の課題が大きな論点になっているが、土日の活動はどちらか1日休むとか、校長会の方でも、部活は土・日は休みという話になっている。しかし実際に調べてみると、土・日は大会等があって、なかなか休めないというのが現実のようだ。

地域の方々ともお話しする機会があるのだが、やはり中学生の行事参加が非常に少ないということだった。それは部活動があって時間がないからということになるが、これからちょうど働き方改革で、部活動の問題も話題になっているので、そういった意味でも、やはり子どもたちが地域の中で活動・活躍できる時間を学校としても確保していかないと、なかなか

学校・家庭・地域の連携は図られないのだということを実感しているところである。

ボランティア活動に関しては、私も昨年度の中学生ボランティアリーダーセミナーに参加して拝見したが、子どもたちは生き生きとしていて、あの生き生きとした顔を見ると、いいなと思う。しかし最初申し上げたように、時間がなくて参加できない生徒たちがたくさんいるということで、様々考えていかなければならないと思う。

それからスキーのことだが、今年の上山市のスキー大会が、今週の12・13日に蔵王で行われた。アルペン競技の参加者は蔵王第二中学校の4名とプラス2名で、6名だった。クロスカントリーの方も、以前は16の中学校が全て出場していたが、今は6校しかリレーに参加しないというように、スキーをする生徒がどんどん減ってきている。私が以前、蔵王第二中学校の教頭を務めていた時には非常に盛んだったのに、15年経つと、もうほとんどスキーをする生徒がいない。先程小学校でスキー教室をやめるというお話があったが、小学校の校長の話を知ると、年にたった1回、学校で行くスキー教室のためにスキーを買わなければならないのはなかなか大変だという話の中で、おそらくこの小学校ではやめるという決断をしたのではないかと思う。ただ、先程新聞委員からあったように、やっぱり蔵王など、上山市内にこんな素晴らしい財産があるのに、これでいいのだろうかということは、中学校の校長たちの間で話になっていた。

#### **津田委員**

今、高橋委員からもあったように、高校もやはり部活動が課題である。高校は校長会の取り決めというものがなく、土曜も日曜も今のところ、部活動を朝から晩までやっている学校もたくさんある。ましてや、その部活動がしくてこの高校に入ってきたという生徒と親御さんがいる中で、その期待に応えなくてはならないということもあり、今の高等学校の部活動は本当に両極端になっている。

本校はというと、部活動はさほど活発ではなく、とはいえインターハイに毎年行く部もあり、そこそこ頑張っている。でもやはり、そんなに活発ではないといっても土曜・日曜も練習している。高校ではそういうことが当たり前のようになっていて、なかなか地域に出向くということが困難になっているというのが実態である。

後でボランティアの話になると思うが、本校のボランティア活動は、学校行事としては一切やっていない。全て生徒会主催で動いている活動だけである。参加率は非常に高く、山形の芋煮会とか、外部の行事に対する活動にも積極的に応募して出ていっているという面がある。新聞に載せてもらった「スコッパーズ」も、生徒会主催で希望者がやっている状況である。

そんな中で、地域の学習、どうやってこの山形を好きになってもらえばいいのかということ、色々やっているところであるが、その中で1つ、やはり発達段階に応じた様々な教育というものがあると思う。では高校はというと、日本や世界に目を向けるような、そういう世代ではないのかという気持ちも先生方は持っていて、海外でボランティア活動をしてみたいとか、そういう希望に燃える機会も高校で養うべきなのだろうか。でも一方では地域を担う人材として、高校生に活躍を期待している部分も多々あるのだからということがあり、ちょっと今、的を絞れていない部分もあるのかと感じている。

あと、キャリア教育に関しては、これもやはり発達段階に応じて小学校時代からキャリアというものを意識してやっていかないと、高校になってから急に、例えば医師不足だから頑張らなくて医学部を受けましょうと言っても、ちょっと間に合わない。小さい頃から、将来何々がしたいという気持ちをしっかり持って、物事に取り組んできてもらおうと非常にいいと高校サイドからは思っている。

そして、様々な場面で、あるいは様々な世代の方々との関わりの中で、子どもたち同士が、せめぎ合って競い合って、その上でお互い様というような認識でいかなければならないが、そのせめぎ合うとか競い合うという部分がものすごく減っている。本校の生徒たちを見てみると、自信がなくて失敗したくないという気持ちだけが強くて、なかなか新しいことに踏み出せない生徒が多いと感じている。このあたりはやはり、家庭教育と社会教育あたりでしっかり各校と連携しながら、やっていくべきことなのではないかと、様々なお話を伺って感じた。

#### **安藤議長**

特にスポーツの現状等に関して、山形ならではのところでスキーもそうだが、そういう小・中学校等の現状があるということ踏まえて、生涯スポーツ、あるいは学校体育その他のところとの連携というものを、県としてどのように捉えているかというところが課題ではないかということが浮かび上がってきたと思う。いわゆる社会教育や生涯学習という言い方だけでは突破できない課題ではないかと、改めて痛感している。ボランティアに関しても同様であると思う。

### **(ウ) 学校・家庭・地域の連携協働関係**

#### **安藤座長**

座長であるが私から発言させていただければと思う。山形県の社会教育 2019 の（案）の 10 ページ、3 の（2）地域学校協働本部の設置、これが国の施策的にも、そしてまた県の方でも、教育プラットフォーム、あるいはコミュニティ・スクール等との連携という点で推奨されていると思うが、このことに関して改めて調べてみると、人口が多い自治体の方ではあまり設置されていないという状況が続いている。これに関しては前々からの議論にもなっているし、意見も各委員から頂戴しているところだが、特に学校、学区の P T A 関係者あるいは地域の方々に、どのように周知されているのか、あるいはどのように周知していくつもりなのか、そういったところを改めて御説明いただければと思う。以前の議論では、校長会などでの説明等があるかないかという話もあったと思うが、地図に落としてみると分かるように、人口が多い自治体では極端に少ないという状況である。もちろん、それに代わるような動きが既にできているから良いというようにも読めるが、必ずしもそうではないような気がする。これに関して、現状と今後の見通しを御説明いただければと思い、発言させていただいた。

## 回 答（事務局）

先程の安藤委員からの御指摘だが、まさしくそういう面はあるのかもしれないという認識は持っている。我々としては、例えば校長先生方が集まる機会に時間を頂いて説明を行ったり、各教育事務所単位で各市町村等に説明する機会をいただいて、周知を進めたりしているところである。推進、推進、と申し上げてはいるものの、非常に難しい課題もあると思いつながら進めているところである。我々の願いとしては、都市部であれ、町や村であれ、地域学校協働活動については推進していきたいという方向性はあるのだが、一律にと言われるとなかなか難しいところもあると思っている。なお、今後、状況等をさらに把握して、対策等について考えていきたい。

### 小田島委員

関連して、「山形県の社会教育2019」の9ページに県の地域学校協働活動推進本部について記載されている。昨年度末の本部会議に出席したが、非常に意義のある会議であったと認識している。ただ問題なのは、この本部会議の動向が市町村に周知されているのかどうかである。県の方針が、市町村に必ずしも浸透しているとは言いがたい状況にあるのではないかとと思われる。このことを再度考えなくてはならない。「連携協働サポートチームの設置」が、今後ますます重要な意味を為すと思われる。市町村の現状を把握している教育事務所の関係者の担う役割が、ますます重要になると強く感じた。本事業が各市町村において広く取り組まれることを期待したい。

別件であるが、家庭教育相談事業の相談件数が減少していることに関して、事務局ではどのように分析しているのか。

## 回 答（事務局）

家庭教育の電話相談についてお答えする。昨年度と比較すると、現時点の件数で60件程の減となっているが、実は昨年度が突出して多かったという状況である。一昨年は、正確な数値は分からないが、同程度、300件程度の件数であったと思う。今年度の相談に関して特別な事情が生じたというよりは、昨年度、頻繁に電話をくださる方がいて、そういったことが重なって多かったというのが実状である。

### 佐藤委員

先程と重なるかもしれないが、県でいろいろと、サポートチームの設置であるとか、指導者の育成・学習機会の提供、その他いろいろな活動をされていると思う。これが、実際に各学校までの落とし込みということになると、どのような形でなされているのか。というのは、私には小学生の娘がいるが、実際に県がこういうことをやります、というお話を現場から聞いたことが正直一度もないので、どういう形で降りてきて活動しているのか、ちょっと疑問に思ったところである。やはり親としては、いろんな機関があって、いろんな場所があるというのは、とても有難いことだと思う。例えば、相談に行くにはこっちがいいとか、いろいろあると思うが、まだ不安に思っていることを、どこに聞けばよいのかも分からないような状況にあるので、まずはその落とし込みをもう少し明確にさせていただけると、親としては有

難しいと思っているところである。

それからもう一点、我々は「PTA」と言っているが、確かに学校さんには大変お世話になっているということはあるものの、参加者はほとんどが親である。だが、先生の中にも親御さんはいる訳なので、どうか先生方に参加していただきたい。例えば、今年の9月7・8日と、本県で東北大会が開催される。およそ2,000人の会員が南陽、東置賜をメインとした会場に集まってくるのだが、ここに、ぜひ先生方にもたくさん来ていただいて、一緒に学ぶ、という語弊があるかもしれないが、親が今こういった勉強をしている、こういったことで悩んでいる、ということと一緒に考えていただくと、もう少し前に進むのではないかと感じているところである。要望も含めてお話しさせていただいた。

## 回 答 (事務局)

貴重な御意見をいただきありがとうございます。これまで、社会教育という分野で対応できたものが、できなくなってきたという状況が、様々な場面で起きていると感じている。多様なニーズということが最初に話題になったが、いろんなニーズにどう対応していけばよいのかという点では、これから様々な部局との連携を密接に図りながら対応していかなければならないと感じている。学校への周知という点についても、これまでは、社会教育は学校教育の中に入らないということが原則であったため、なかなか踏み込めなかったが、これからは連携をとる中で、必要な部分にはきちんと働きかけをして、浸透させていくということが生涯学習分野では必要になっていくと思う。そして、コーディネーター役を果たしながら、いろんなところで、必要なものを必要な時に、こういうものがあると紹介しながら、関係部局と協力して対応するというような取り組みが必要であると、今お話を聞きながら感じたところである。学校については、義務教育課や高校教育課と連携を取りながら対応していきたいと思う。

## (エ)社会教育施設・社会教育主事・その他社会教育一般

### 高橋一枝委員

社会教育施設ということで「県立図書館の整備・充実」、そして「県民が集い・学ぶ県立図書館整備」ということでお話ししたい。来年度もこの目的に向かって事業が進んでいく訳だが、昨年の9月に県議会の予算委員会で、指定管理者の導入に関する御意見が県議の方からあったことに対して、教育委員会ではそこに向かって検討していくというお答えをしているのだが、今現在、どのような進捗状況なのかをぜひ教えていただけたらと思う。他の県立図書館で指定管理になっているところとして、東北では岩手県立図書館があるのだが、その事例を思いながらお伺いしている。市町村で指定管理者を導入しているところもあるが、県立図書館が市町村立のまとめ役となる際に、どうしても民間という部分が、弱い部分になったり、不安だったりということもあると思うので、そういったところを検討していただきながら、ゆっくりと進んでいただけたらと思っている。

### **安藤座長**

指定管理の導入に関しての進捗状況ということで、分かる範囲で教えていただきたいと思うが、如何か。

### **回 答 (事務局)**

先の県議会で、教育長が予算特別委員会の中で御説明をさせていただいたところである。今、委員からあったように、民間が指定管理をするその予算、また私どもの方で直接管轄する予算、そうしたところを合わせ持ちながら、その利点、それから伸ばしていきたい点、そういったところを整理しながら対応していくということで、今、行っているところである。記録を持ち合わせていないので、詳細については申し上げられないが、まず、慎重に対応しながら、そして閲覧の方法や、あるいは書架の使い方等々についても、十分に吟味をしながら、県民の皆様が一番良い方法は何かということについて、今、話をしているところである。詳細については、また来年あたり、お話ができるのではないかと考えている。

### **安藤座長**

岩手県立図書館も指定管理を導入して、いろいろと中でも御意見があるという話も聞いている。私は前任が岡山の大学であり、岡山県立図書館という直営の、貸出冊数が人口当たり一位をキープしているところがあった。そういったところの実態を見ているので、相互にやはりプラスとマイナスのところがあるかと思うし、それから市町村立と都道府県立の違いという部分もあるかと思うので、そういったところを踏まえつつの検討ということを、私からもお願いしたいところである。

### **齋藤委員**

3つのことをお話したい。まず1つ目だが、嬉しかったことである。2019年の計画の3ページ、年間計画の中に新庄まつりが入ってきたということは、山形の宝というお話もあったが、大変良かったと思っている。こうしたところから少しずつ変わってくるのかなと思ったところである。

2つ目だが、室長から広報という話もあった。それで、「社会教育って何やってるんだ？」というのが一般の人の見方だと思う。私たちも分からないところがいっぱいある。そういったところで、広報ということも重要ではないかと思う。最上教育事務所の社会教育課では、「まなびい8」という広報誌を毎月1回発行している。社会教育で今こんなことをやっていると、A3用紙の表のページに教育事務所の取組みが書かれているし、裏面には、8市町村の月々のイベントや情報が載っている。大変分かりやすく発行されているのではないかと思う。こうした広報活動を充実していくことが、これからますます重要になっていくのではないかと思う。最上教育事務所の広報誌は20数年間、22、3年は続いていると思う。

最後に1つだが、安藤先生も毎回のように話をしちゃうが、社会教育主事の問題である。去年も県内の自治体で配置されていないところが結構あった。その市町村に対しての県の指導とか、これからどうするか、そして、実際働きかけてどうだったのかということをお話いただければと思う。

## 安藤座長

社会教育主事の養成に関して、私からも改めてお願いと確認だが、一昨年くらいからお願いや発言があったと思うが、社会教育主事の有資格教員がどのくらいいるのかということ。これから10年ぐらいで、かなりの人数が退職する見込みであるという発言もあった。その実態を数値できちんと把握して、どのように退職していくのかという見込みをもった、いわゆる計画養成に近いような形で考えていく、ということをしていかないと、昨今動きが鈍っているが、学校の地域連携担当教職員の設置義務化、という動きになるかは微妙なところではあるが、そういった有資格教員が地域学校協働本部にしても窓口になって、教務主任などの方だけに負担をかけないという形で、かつ、社会教育の理屈というか、筋道を分かっている方々が間に立つということは、非常に重要な事だと思う。計画養成に相当するような形で、数値で示した上で募る、あるいは、ある程度強く言っていくということが必要だと思う。そういったビジョンを含めて、齋藤委員と重ねての質問と意見ということで、よろしくお願ひしたい。

## 回 答 (事務局)

社会教育主事の養成については振興室でも課題と捉えており、お話のように50代が非常に固まっていて、今後大量に退職が想定される。今盛んに働きかけている30代、40代は、採用がかなり少なく、人数が限られているので、学校を空けて社会教育主事の講習に手を挙げる方がいないのが実情である。従って、今採用が多くなっている20代に積極的に働きかけたいと考えている。先日の新任者研修会の際にも、社会教育主事という資格があり、どのような資格で、どのような仕事をするのか、どのような形で資格を取るのか、などという話をさせていただいた。今後、学校にぜひ必要とされる資格なので、担任が一回り二回り終わって、30代になったらぜひ取得するような形で考えてください、ということもお願いしてきた。したがって、30代、40代の方々への働きかけは今後も続けるが、同時に、採用が多くなっている20代の教員にそういった意識の働きかけを行い、30代になった時に受けていただけるような働きかけを進めていきたいと考えている。

## 安藤座長

教員採用者は、点数を加算する資格というところで議論があると聞いている。再来年度からカリキュラムが変わり、社会教育士という制度が新設される。それは、社会教育主事の講習あるいは大学での課程において、24単位修得した人に関しては社会教育士を名乗ることができるということである。併せて将来的に、教科では加算が始まっていると思うが、もしかしたら加算というところも含めて、御配慮をお願いできればと思う。

## 回 答 (事務局)

義務教育課で所管している教員の研修には、大学院研修や長期研修があるが、その中に社会体験研修というものがある。これは、社会教育施設で研修したり、民間に出向いて研修したりするものだが、このことについて、教育事務所長や各少年自然の家在所長にお話しをして、今、若い教員ということがあったが、例えば3ヶ月くらい少年自然の家などで研修をし

て、そういう場で子どもに接してみる体験を若い先生方にさせていただいて、それを糧に社会教育主事へ、というスキーマを作りたいとお願いしている。それぞれの方々からは御賛同いただき、今年から、まず呼びかけていこうと思う。ただ、やはり今あったように、なかなか手を挙げてくださる方がいないので、各市町村教育委員会の教育長にもお話をし、取りやすい環境ということ、それから、初めの一步をうまく踏み出せるよう、何とかそういう流れを作るということで、生涯学習振興室と義務教育課で連携して行っているところである。今年は少し難しいかもしれないが、まずはそうしたことを呼びかけながらと思っている。

## 回 答 (事務局)

先程、安藤委員から、社会教育主事の市町村への配置等についての御質問があった。1点目については、今年度、15市町村で社会教育の有資格者発令がある方が配置されている。残念ながら、残り20の自治体は配置になっていないという状況だが、今年度、東北大学の社会教育主事講習と国社研のB日程の講習に、有資格者がいない市町村の主管課の職員が派遣されている。実際、今年度3市町村から派遣していただいております、行政職の方が社会教育に関する資格を取るという動きが出てきている。ちなみに今年度については、県内で17名の方が、教員籍、行政籍を含めて、社会教育主事講習を受験している。それから、今数値を持ち合わせていないが、毎年確実に取っているデータから、社会教育主事の有資格者数については、御指摘のとおり、退職者数と資格を取る方のバランスという点で、減少傾向にあることは否めない。小・中学校に関しては、数値的には各校2名ずつ配置しても、社会教育主事有資格者を配置できるような現状である。高校や特別支援学校等も含めると、そうした状況にはならないということが課題である。県では予算をつけて、社会教育主事講習に受講者を派遣する事業を行っているので、今後ともこうした状況について御理解と御示唆を頂ければと思う。

### 安藤座長

私の大学も毎年15名ずつ輩出して、ようやく社会教育主事の発令を受ける教え子も出てきているような状況である。山形に残るのは半分くらいというような状況なので、なかなかすぐには地域に貢献できない、追いつかないところがある。やはり、働きながら学ぶということ、社会教育主事講習の受講の仕組みということ、そういったところの支援を今後ともお願いしたいと思う。その他の御意見は如何か。

### 二瓶委員

先程、各校に1人ないし2人は、社会教育主事有資格者の先生がいらっしゃるということだった。自分の学校にどなたかがいるということは、地域コーディネーターとして本当は一番心強い味方になるはずであるが、今まで「私、社会教育主事です」と紹介されたことはない。他の学校までとは言わないが、せめて学校内だけでも教えていただくと、コーディネーターも相談などができるのではないかと思う。

また、4月になると人事異動で新しい先生方が学校にやってくるが、地域学校協働活動や学校支援事業などの制度を知らない先生がほとんどである。先生方の一番の味方として、忙

しい先生方を何とかお手伝いしたいという地域の思いがあると思うが、肝心の先生方がこういった事業をご存じなく、コーディネーターから説明しなくてはならない状況は残念である。学校教育の方でそのようなことを教えていただけるとありがたい。先程、学校教育と社会教育は別だからというお話もあったが、別じゃなくて今一緒にやろうという話なので、何とかならないものかと思っている。そのあたりはどうなっているのか。

それと、上の方では情報がたくさんあると思うが、必要な情報が末端の方まで伝わるような仕組みがあるといいと思う。例えば、私は学校支援の担当だが、今後一緒にやっていく放課後子ども教室の方に協働活動について話をしたところ、何も知らないということがあった。連携という観点から、情報伝達の仕組みとしてできると良いと思う。

## 回 答 (事務局)

先程、これからは社会教育だけではやっていけないので、いろんな部局と連携しなくてはいけないということを申し上げた。やはり、あり方を変えなくてはいけないと思う。今のお話にあった、特に義務教育課との連携については、一番大切なところと考えており、そこを一層推進させるという方向で考えている。

なお、学校や先生方に地域学校協働本部の理解を、ということに関しては、生涯学習振興室の課題であると捉えている。先生方に対して、機会を設けて丁寧で分かりやすい説明を行っていかねばならないということで、御意見を頂戴したいと思う。

## 小田島委員

1つの要望であるが、こういう冊子（「地域学校協働活動」や「地域学校協働活動ハンドブック」）が文部科学省から発行されている。その中には、社会教育法の改正やこの事業を国が教育行政の中でどのように捉えているかなどが記載されている。この冊子が社会教育委員の手元にないと、県教委がどのように取り組もうとしているのかが、理解しにくくなるのではないだろうか。国の重要な資料は、是非社会教育委員に周知されるような環境を作ってほしいと願っている。

## (3) 平成 30 年度生涯学習推進状況について(※生涯学習検討委員会の内容)

資料説明 (事務局)

## (4) 平成 30 年度山形県公立高校生ボランティア活動実態調査

資料説明 (事務局)

## 高橋一枝委員

大変わかりやすく丁寧なアンケートをいただいてありがたい。先程、齋藤委員からもお話があったように、最上地区ではたくさん的高校生ボランティアが、いろんな分野で多岐にわたって活動をしている。その中で中学生を見ていると、その活動が活発になる一方で、ボランティアさんは、自分たちの地域に何ができるかということを見つけて咀嚼して、さらにその活動を広げていくということで、今、展開しているのだが、その、自分たちが咀嚼する場

所、つまり会議をしたり話し合いを持ったりする拠点という場所が、今は無い状況になっている。各高校生が学校を離れたところで活動するので、活動する場所ということ考えたときに、本当に高校生の皆さんが持続可能な地域を目指すための拠点、安心・安全でいられる居場所づくりという点を、ぜひ自治体にも働きかけながら、作っていただけたらと考えている。

## (5)その他

### 6 連絡（事務局）

- ・議事録案については、委員の方々に近日中に送付する。内容を御確認いただいたのち、訂正したものをホームページに掲載する。
- ・現行の社会教育委員の任期は、平成 30 年 5 月 21 日から新元号 2 年 5 月 20 日までの 2 年間となっている。御苦勞・御負担をおかけして大変恐縮ですが、来年度も引き続きご協力いただけるようお願いしたい。

### 7 閉会

#### ※資料の訂正について

資料 1 「平成 30 年度 社会教育事業の実績」IV-2-(8) 生涯学習施設の整備・充実に  
おいて誤りがありましたので、下記の通り訂正してお詫び申し上げます。

<16 ページ ③ ア 学習情報収集・提供事業 3 行目>

[誤]

[正]

・「アクセス件数 82,121 件」 → 「ページビュー数 34,687 件」

・「学習相談 282 件」 → 「学習相談 35 件」

<17 ページ③ウ「ふるさと塾」推進事業 2 行目>

[誤]

[正]

・「平成 31 年 1 月末時点公開数：282 件」 → 「平成 31 年 1 月末時点公開数：305 件」